

曲論の系譜

——南京事件期における図書掠奪問題の検証——

金丸 裕一

1. はじめに

近代史をめぐる「記憶」について、とりわけ各民族・国家が独立と尊厳を賭して戦った第二次世界大戦に関する歴史叙述の中で、数多くの「神話」的なストーリーが語り継がれて行くことは、ある意味においては理解が可能な現象である。まもなく60年になろうとする歳月を遡った時期に終結した戦争ではあるが、東アジア地域を例にとっても、これを契機に独立、乃至は半植民地状態からの解放を達成した民族・国家も多い。人々の素朴な語り継ぎや床屋談義において、かかる「神話」が伝承されて行くことは、決して非難できないのではないか。いわば現代に連なる体制の成立に対する正当性を裏書きしているものが、第二次世界大戦における闘争と犠牲の集積なのである。

たとえば朝鮮民主主義人民共和国において近年、きわめて超常的ともいうべき、抗日から独立に向かう時期の「史実」が発見されている。大方より大袈裟な演出と一笑に付されるにせよ、彼ら自身が目下、本気になって「事実」の創作に取り組んでいるという側面を物語るものであろう。すなわちこれ自身が、現代史認識の上で無視することのできない「歴史的イベント」といえるのである¹⁾。

わたくしが専門としている中国近代史研究において、特にここ10数年来の中華民国（台湾）、及び中華人民共和国における一次史料の急激な公開を契機として、研究のおおよその流れは、「実証主義」へと回帰していった。中国においては、1980年代初頭には「禁区」とされていた各種の主題、たとえば国民政府に対する評価、資本主義的發展の見直し、そして外国資本への再評価などが次々と研究の俎上にのぼったことは、記憶に新しい。同じく台湾の場合、一連の民主化過程において史料の開放と研究領

域設定の自由がまたたくまに拡大し、歴史学界におけるかつての「中国史一辺倒」からこんにちの「台湾史一辺倒」への移行は、余りにも急激であった。

21世紀を迎え、かかる趨勢は留まるところを知らないかに見受けられるが、しかし近年になっても、特に中華人民共和国で発表される日中戦争史（抗日戦争史）関連の研究においては、歴史的事実の発掘と記録よりは、むしろ民族的記憶の強調と継承を主張するかのごとき論著が、依然として数多く発表されつつある。筆者は、これらが一般的・大衆的な認識として、今後とも中長期的に語られることは、仕方ないことであると考えている。しかし、「実事求是」を本分とする歴史学者は、かかる動きとは距離を置き、冷徹かつ客観的に先行研究や史料を分析する必要があるのではないかとも思う。

この小論では、近年の「南京大虐殺事件」（以下「南京事件」と略す）時期に頻発した、日本による掠奪問題をめぐる研究に焦点をあわせ、幾つかの新しい「神話」が創作される過程を詳細に検証してみたい。その際、考察の対象は文化財、とりわけ図書・雑誌に対する「掠奪」の問題に限定していく²⁾。なお、本文中での引用において、出典については原則として末尾に附した「参考史料・文献一覧表」の記号によって示してある。

2. 衝撃的な論点の内容

戦時期の日本による文化財掠奪問題に対して、筆者がそもそも関心を持つきっかけとなったのは、1997年12月に台北で開かれた「南京大屠殺六十年国際学術シンポジウム」でのことであった。この席上、趙建民（本人は参加せず論文の代読であった）が発表した論文[E-②]は、日本が南京事件の時期に膨大な図書を掠奪して、これを日本へ持ち帰

ったという論点を提示した。台北で発行されている当日の夕刊や翌日の朝刊は、こぞってこの報告を絶賛していたものの、筆者らは先行研究に対する扱ひ方が不適切であるとの印象を強くし、疑念を表明した³⁾。無論、代読であった故に、会場での議論はできなかった。

率直なところ筆者は、南京事件時期において、各種の掠奪行為が横行した点については、すでに公刊されていた史料集などを通じて承知していたので、かかる乱行が「徴発」に名をかりた食料品などの「掠奪」以外の場面でも頻発したという指摘に対しては、あまり疑問には思わなかった⁴⁾。したがって、この問題を早くから研究していた松本剛の著書[D-⑮]などに対する配慮が不足しているという点のみ、批判を集中させた感がある。

帰国した後、徐々にではあるが関連する論文を含め、資料の蒐集と解説に努めていたが、この過程において趙建民⁵⁾による研究は、予測を遙かに超越した、極めて衝撃的な「史実」を提起したものであることに驚いた。その内容は、次の三点に集約することが可能である。

- (a) 九・一八事変の後、日本の侵略軍の中には、専門的知識を有し、専門的訓練を受けた、師団長クラスに相当する「文物接收員」が配置され、……たとえば1938年3月、日本は各方面の専門家からなる「科学考察団」を中国南方に派遣して「考察」をした。この一団は南京だけで72カ所の文化機関を検査し、スパイ（原文では特工……引用者）が7000人にも達し、労務者200人、トラック810台を用いて、集めた図書が88万冊であった。全ての「考察」の過程で、日本に持ち運んだ書籍は当時の日本最大の図書館—帝国図書館—の蔵書よりも、更に多かった[E-⑰, 38頁]。
- (b) 「南京大虐殺」の前後、日本の侵略者が南京で掠奪した図書の総数は実に驚くべきものである。それは当時の日本国内で最大であった帝国図書館の総数85万冊に相当し、しかも同時期の日本における都道府県クラス図書館

で最大であった大阪府立図書館の蔵書量は25万冊に過ぎなかった。日本の侵略軍が南京において図書を掠奪する過程の中で、相当な数の図書が燃料として焼却されていたにも係わらず、彼らは確かに大量の整理を経た重要な書籍をみな国内へと持ち去ったのであった。これは既に争えない事実なのである[E-⑱, 245頁]。

- (c) 日本国内では、中国及びアジア問題を中心的課題として、「東亜研究所」が設立された後、あいついで「東洋文化研究所」（東京帝大、1941年）、「東亜経済研究所」（東京商大、1942年）、「東亜風土病研究所」（長崎医大、1942年）、「大東亜図書館」（1942年）、「民族研究所」（1943年）などが設置された。当時、南京などの場所で掠奪した図書はこれら研究機関の中で、十分な役割を發揮したのである。簡単にいえば、日本の侵略軍の南京における図書掠奪は、日本の中国侵略戦争の進展と完全に符合しており、これは単に戦争中の焼く、殺す、奪うという野蛮性を暴露しただけでなく、……中国の国情を理解し、植民地統治を建立するための、さらに深い研究の展開に対して重要な図書資料を提供したのであった[E-⑱, 241～242頁]。

この見解は、次の内容に再整理することが可能であろう。日本軍は計画的に専門的なスパイ（特工）を養成し、これを大量動員して80万冊以上の図書を掠奪し、日本へ運び去った。その図書は全国各地に設置された研究機関（しかも大半が、現在においても存続している）において、植民地統治を研究する目的で利用されていた、というのである。

わたくしもかつて、財団法人東洋文庫近代中国研究室に所属して学究生活を過ごしていた時期があった。また当然、日本国内に遺された史料の発掘は歴史家の重要な任務であると考えて、できる限りの仕事を実践している。どこかで出逢ったかも知れない書籍の中に、大量の掠奪物が混ざっているというのであるならば、これは他ならぬ我々自身の問題となるのだ。したがって、専門外であることを省みず、

作業を細々と継続させた次第である。関西へ引っ越して以来、大学内における行政的な仕事で忙殺され、研究活動から次第に遠ざかっていった事への反省とリハビリを兼ねていたもので、活動は急がぬもの、手は休めなかった。そして1999年度以降に進められた共同研究「興亜院による中国調査」（研究代表：宇都宮大学国際学部教授・内山雅生）において、中支建設資料整備委員会について調べ始めたわたしは、やがてこの衝撃的論点が、完全な誤謬であることに気づいたのであった。では、何故こうした曲論が罷り通ろうとしているのだろうか？

3. 日本と台湾における文化財掠奪の研究史

勉強を始めたばかりの頃、二つの事柄が気になった。第一に、最近の中国で発表される研究の多くで、趙建民がいうような問題が指摘されているという点である。しかし第二に、研究史を時系列的にたどれば、この問題をとりまく学問的な営為は、実は中国ではなく、日本や台湾において1980年代以降、地道に進められていたという事実であった。しかも、二次史料は相当な分量が残されている。よって先ず、後者における研究動向を分析することが、史実究明のための前提的な仕事になるだろうと考えた（参考史料・文献一覧表を参照されたい）。

日本においてこの問題について初めて論及した学者は、日本10進分類法（NDC）の考案者として名高い、もり・きよし（森清）であった。彼は、若き日に勤務した上海近代科学図書館、及び華中鉄道図書館での仕事を回想するとともに、上海戦において散乱した図書が、「占拠した日本兵の手で薪炭代りに暖炉に投込んだり、和紙はチリ紙代用にされたという」ような戦闘下の状況を伝え〔D-①〕、更に櫛島の報告〔B-⑳〕を引用しながら、中支建設資料整備委員会の活動の一端にふれている。

1970年代に入ると、日中国交正常化前後から進められていた、科学者の戦争責任の問題と密接に関係した実践的な運動の中で、文化財の略奪に焦点があてられるようになった。すなわち、みづからが平素研究を進めている時に利用している書籍の中にも、中国から略奪してきたままになっているものが

あるのではないか。これは本来の持ち主である中国人民に返却すべきであるといった、良心的な発想を動機とする一連の初歩的な研究である〔D-②～④など〕。この中で実藤は、外務省文化事業部特別研究員時代に自らが29冊の書籍を中国から持ち帰ったという告白をして、これらの返還に至るまでの葛藤を記す。さらに「きくところによれば、ある図書館では、略奪漢籍をのぞくと、中枢になる書物はなくなってしまう、とのことである」と述べた上で、「その略奪書のあるところは、中国の参観者には見せないことになっている、ともきいた」と続け、戦時中の掠奪行為が、実は現在進行形の問題であることを、強く示唆した。そして、「はやく略奪の罪を清算し、平等のたちばにたつて、学問を論じようではないか」と呼び掛けた〔D-④, 392～393頁〕。

ほぼ同じ時期に、上海自然科学研究所、及び満鉄上海事務所図書館に勤務していた西村捨也は、阿部洋による聞き取り調査において、次のように証言した。彼は南京事件後に、南京・蘇州・杭州などで大量の書籍を収集・整理した経験を述べたものの、その行方についてはこう指摘する。「いや、たぶん返還はできなかったと思いますよ。また返すといっても日本は戦争に負けちゃったし、その一部は個人で持ってきた人もあるようです。わかっている人は、『あれは、あいつが持って来た』って言いますよ」〔C-⑦, 18頁〕。

また、書誌学者の長沢規矩也も、戦時下の帝国図書館において香港・馮平山図書館から接収した古典籍を苦心して整理し、戦後には簡単な目録を付して返還した経緯を述べている〔C-⑥〕。実は、こうした良心的な証言は、後の日本における研究の方向性に多大な影響を与えたと見受けられるが、この問題はひとまず留保して、台湾側の研究を概観してみたい。

本稿末尾の目録を見れば判明する通り、戦後の中国語文献は、1980年代半ばに至るまで、ほぼ全てが台湾において発表されていた〔E-①～⑤〕。これは恐らく、1960年代から1970年代にかけて、中国側が政治的大混乱によって研究どころの騒ぎではなくなっていた世情とも関係していると思われる。

しかし、より本質的には、国家級の文化財や公文書、さらに図書などが、戦時中には沿海部から重慶などの奥地へ疎開し、戦勝後には再び元の場所へ戻ったものの、1949年の中華人民共和国成立前後の段階で、みたび台湾へ避難してきたという、数奇な運命に起因しているのだろう⁶⁾。多くの関係者が文化財とともに台湾へと移動し、われわれこそが「中華文明の正統なる継承者である」とする立場を宣伝するために、旺盛な活動を展開した現れなのである。筆者は未見のため目録には反映されていないが、近年の研究における脚註を読み進むと⁷⁾、1960年代以来、図書館関係者は自らの経験を盛んに公表していたことが判明する [E-⑯]。

こうした仕事の特色として、次の二点が指摘されよう。第一に、理論的な冒険が少ない反面、緻密に史料を蒐集・分析していること。たとえば張錦郎・黄淵泉による年表の場合、合計140種類を超える書籍・雑誌の他、1936（民国25）年来の国立中央図書館公文書などの一次史料にもあたり、一つひとつの出来事に対して、文献的な裏付けを与えている [E-①]。このような学風は、張錦郎の研究論文にも反映されている。当時入手が可能であった文献・一次史料、そして恐らくは台湾へ渡ってきた当事者への調査も交えながら、抗日戦争の勃発から戦勝に至る期間の図書館史を、実証的に描き出すのであった [E-④]。同じように、蘇精の研究においても、日本語文献を含む膨大な史料の蓄積が、立論の背景に存在している [E-③]。当時の台湾における学問をとりまく政治的環境の、まだ不自由であったことが、意図せずに招いた実証主義であったのかも知れない。しかし淡々とした文章には、今日かえて好感が持てるのも、また「歴史」の醍醐味なのだろう。

これと関連して第二に、当事者みずからによる史料集や回想録の執筆乃至オーラル・ヒストリーが、1980年代から意識的に進められていたことをあげなければならない。すなわち、実際に抗日戦争時期の文化財疎開に係わった杭立武の場合、進んで筆をとって体験談をまとめたほか [C-⑧]、研究者による聞き取りにも、大いに協力している [C-⑬]。蔣復璁の場合も、回想が公刊されたのはつい最近の

ことであるが、調査そのものは1985年から1986年にかけて実施されていた [C-⑭]。

そしてこれら成果の中でも、王聿均は出色の研究を発表している。王論文は、第一次上海事変時の商務印書館と正中書局の破壊から、戦時における各種学校・文化機関、そして自らが勤務する中央研究院の戦争被害について、各種二次史料と賠償委員会檔案を中心とした一次史料を駆使して描き出した。さらに日本軍が知識人に対して加えた迫害にも論は進み、文化侵略の全体像を実証的に提示した、初めての記念碑的労作といえるであろう [E-⑤]。惜しむらくはその後、王らが提起した問題意識を継承する研究が、台湾においては管見の限り出現していない。他の主題についても指摘できる事柄であるが、1980年代後半以降、李登輝時代を迎えた台湾歴史学界の関心は、急激に台湾史へと移行しつつあった。一次史料の積極的開放政策にもかかわらず、中華民國史や清末史などを専攻する人々の比率が、にわかには低下したように見受けられる。では、これら成果はいったいどこに引き継がれているのであろうか？

残念なことに同時期の日本側研究者は、かかる台湾学界の動向に、ほとんど無関心であった。論文の引用などを含め、学術的交流が本格的に進展した形跡は薄い。以下、再び日本における研究の展開を追跡してみよう。

1980年代から1990年代初めにかけての期間は、日本においても戦争と文化の問題が議論され始めた起点である。こうした中で、安達による業績は、ある意味で一つの可能性を示唆していたと評価したい。彼は戦時期の二次史料 [B-⑫, B-⑰, B-⑳, B-㉑など] を用いて、戦時下における書籍「保護」の事実関係を鳥瞰した上で、戦後において進められた返還問題についても、文部省史料 [C-①] によりつつ解明した。のみならず、蔣復璁による故宫宝物疎開の紹介なども引用し、加害と被害の両面から、戦争と図書を描写しようと試みたのであった [D-⑤, 69～74頁]。ところがその後、研究の主流は、時代の要請もあってか、次第に日本による加害面の強調へとシフトしていった。

その一つの契機は、1982年の元・国立国会図書館司書であった青木実による小説風に仕上げた自伝

的作品の発行にあったのではなからうか。青木は、1938年に南京で進められた図書接収・整理事業に参加しており、当時すでに報告を発表していた〔B-⑬〕。青木はこの作品の中で、同室になった与謝野麟（与謝野鉄幹・晶子の子息）が軍人に怯えて発狂したこと、大佐三四五に私娼街へ連れ出されたことなどとともに、満鉄調査局から派遣された吉植悟が密かに書籍を持ち出そうとしていたという、衝撃的な告白を行った〔C-⑩〕。そして不思議なことに、私家版であるはずのこの書籍は、直後に相次いで発表される文章の中で、たびたび引用される。しかし、冷静になってこの「関係」を追究していくと、そこに一つの求心点が発見できたのである。

それは、国立国会図書館に勤務する人々による「関係」であった。すなわち、1986年8月17日の『赤旗』は、「もう一つの南京“大虐殺”」と銘打った特集記事を掲載し、「その数なんと八十八万冊」に達する「“文化大虐殺”ともいふべき、大規模な図書・文献の略奪」を報道する。ここでは、インタビューはほぼ青木実の独壇場になった。さらにこれが「完全に国際法違反の行為」であったという、同じく国会図書館に勤務する司書の山崎元によるコメントが付されており、これら図書については「特務部が直接管理しており、貴重品は“消えてしまった”疑い」もあると述べられている〔D-⑥〕。そしてその後は山崎元が、『赤旗』や『文化評論』、そして『前衛』など日本共産党の機関紙誌において、棚島の報告〔B-⑳〕なども紹介しながら、相次いでこれに関わる発言を繰り返していたのであった。

特に争点となるのは、「略奪」後の書籍の行方であろう。これに関して山崎は、汪政権への返還そのものは認める。しかし「かいらい政府への引き渡しとあっては、名目的ではなかったのか、……真の主権者の中国人民の手に正しくもどったかどうか、定かではない」と判断を保留した〔D-⑦〕、及びD-⑧〕。しかし論調はまもなく、「目下のかいらい政府に無断もしくは共謀して、貴重図書や金銀財宝のかなりの部分、かすめとったり山分けしたりしたものと容易に推理できよう」と、急速に「略奪説」へと傾斜していったのであった〔D-⑩〕、175頁〕。

その後に発表された幾つかの研究にも、前出の実

藤による「証言」を含め、こうした見方が刷り込まれていったものと思われる。例えば小黒は、外務省特殊財産局が翻訳した文献〔C-③〕を「外務省がまとめた資料」と勘違いをし、しかも「戦争中略奪された文化財の総数は、3,607,074件、そのうち書籍は公的機関から2,253,252冊、個人から488,856冊となっている」と、「略奪」の具体的数値を紹介する〔D-⑬〕、512頁〕。しかし小黒の研究などは、思いこみによって史料を読んじってしまった（あるいは読まなかった？）典型であろう。外務省が日本語訳した史料において登場する数値や物品一覧表は、「略奪」よりも更に幅広い概念である「損失」のリストであり、「公私の機関か個人が申請登記したものに付、本会に於て厳格に審査した文物損失」と明記され、書籍の項目を丹念に追うだけで、「略奪」以外にも、戦闘で破壊されたり、焼却されたり、行方不明になったものが含まれているのは、一目瞭然である〔C-③〕、凡例部分など〕。

同じく国会図書館に勤務していた加藤一夫の場合にも、次のような講演録が見られる。「肉体的に中国人民を抹殺した後で、戦禍から文化財を守るという大義名分を掲げて、精神的に抹殺を完成させた」南京における図書の接収活動に関わったメンバーに、かつて事の成り行きを尋ねたものの、「口が重くて話は進」まなかった。さらに話題は次のように続いていく。「後に、この資料は当時の国民政府に返還したことになっていますが、そのへんのことは今もって分かりません。かつてはく自身、国立国会図書館の書庫の中で、この時の資料と思われるものがあるのをチラッとみたことがあります」〔D-⑭〕、101頁〕。

誤解を恐れずに批評するならば、この時期における研究は、史料を丹念に発掘・解読し、事実関係を明らかにしようという、歴史家に求められる努力を、大方は放棄していた。そして、話題が肝腎な部分に至ると、推測で誤魔化したり、あるいは「チラッとみたことがあります」などと、いかにも思わせぶりの口調で、読者を煙に巻く。わが国の図書館の図書館たる国立国会図書館に勤務する人が表明する見解でもあり、多くの同業者に対して、多大な影響を与えてしまったのではないだろうか。ちなみに、前出

の西村捨也も、戦後は、最高裁判所図書館に勤務して定年退職を迎えている。

かかる混迷を打開する新星は、皮肉なことにも地方在住の図書館関係者から出現した。岡村敬二と松本剛である。1990年代における当該分野の研究、さらにいえば綿密な史料発掘に基づいた研究は、この二人を嚆矢にすると断定できるのかも知れない。岡村は、長く大阪府立図書館に勤務するライブラリアンであった。松本の場合は異色であり、本来は大阪経済大学において会計学担当の教授であったが、図書館長への就任を契機に、戦争と図書の問題について、本格的かつ実践的に取り組み始めた経歴を有する。この二人の研究姿勢の特色は、先行研究においておざなりにされた「史料」に対して、執念にも似た調査・追跡を行い、実証的な歴史評価を目指した点において、ほぼ共通していた。以下、南京事件時期に限って、二人が発掘・利用した史料を整理してみよう。

まず岡村から。彼は、一連の事情を知る上で最も基本的な文献である、中支建設資料整備委員会による報告書[B-35]を用いた、最初の研究者であった。この他にも、当事者による報告[B-13, B-17, B-26]など、満鉄附属図書館関係の文献を中心に多数]や、この時期から本格化した台湾・中国における研究[E-2, E-6]を参照する他、上海自然科学研究所や東亜同文書院に関する文献も利用し、「中支建設資料整備委員会」が果たした歴史的な役割を評価した。そして、汪政権に返還された図書の行方に対しても、先行研究にみられる無責任な憶測は踏襲しなかった[D-9, D-16]。

つぎに松本について。彼の研究は、勤務先である大阪経済大学図書館に残されていた、戦後に占領軍(GHQ)が文部省経由で各種学校に送付した、戦時期のアジア各地から略奪した図書の搜索、及び返還を命じる、厚さ5~6センチにも達する「覚書」綴りとの出会いから始まる。そして、略奪の顛末を、戦時期から戦後にかけて、中国のみならず朝鮮半島や旧満州、アジア地域を含む広範な地域において探ろうという、野心的な仕事に取りかかった。本稿が対象とする、限られた主題に関しても、『図書館雑誌』を中心とした二次史料[B-17, B-35, B-

36, B-37, B-40, B-46, B-47, B-50, B-53, C-1, C-2, C-3, C-6, C-10など]、及び先行研究[D-1, D-4, D-5, D-6, D-13など]を丁寧に読み進め、具体的な展望を示した。略奪の過程そのものに対しては、ほぼ中支建設資料整備委員会が出版した公式見解によっており[D-15, 73~81頁]、また汪政権への返還についても、各種史料を用いて淡々と記述する[D-15, 231~233頁]。

しかし、GHQからの1948年9月21日付「覚書」に書かれた内容、すなわち「日本政府が南京に設立した中支資料調査事務所(the Central China Data Research Office)が北京及び南京の国立博物館から図書を略奪して、1937年に日本に持ち込んでいる」という史料を示し、「南京の図書が日本軍により保管されたのち中国政府に返還されたという従来の説明は一部、根拠を失うことになる」と冷静に指摘するなど、旧来の研究からは格段に飛躍した水準を有していたのであった[D-15, 241~242頁]。

以上、台湾と日本における研究史の概観を通じて、次の諸点を指摘することが許されるであろう。第一に、「研究」という側面から評価した場合、台湾においては1970年代から1980年代半ばにかけて、本格的な展開が始まっていた。日本の場合は、安達の例外を除いて、実質的には1990年代を待たなければならなかったのである。遅れてやって来たものの、この胎動は本物であった。1990年代初頭から、『書香』、『収書月報』、『北窓』などの満鉄附属図書館関係の雑誌、また上海自然科学研究所の『中国文化情報』などが復刻されはじめ、研究条件は格段に向上したのである⁸¹⁾。

しかし第二に、研究の系譜をたどった場合、既に相当の成果を有する台湾の研究を、あまり参照することはなかった。語学的な問題もあると思うが、研究対象地域の言語によって書かれた研究に通じないままに作業を進めることは、大きな損失を招く。加えて第三に、岡村・松本ともに、問題関心は極めて広範囲に及び、スケールが大きい論考を発表する一方で、歴史家としての訓練を受けたものであれば容易に気が付くであろう、一次史料[A-1~14など]への積極的接近を試みることは、残念ながらなかつ

たのであった。

そして意外なことにも、特に松本の研究は、その後中国において大いに「活用」されていくのである。しかも、極端にデフォルメされながら……。

4. 中国における文化財掠奪の研究史

時代の雰囲気というものは、恐ろしいものである。思い返せば20年程前、筆者が研究を志した時分に、ムキになって中国で発行されている各地の「文史資料」というシリーズを集めていた時期があった。ここに収録されている史料は、大半が二次史料としての回想類であり、批判的に解釈しなければならない性格の文献ではあるが、「内部発行」と記された稀少性に吸引され、これを利用することで論文の「格」があがるのではないかといった幻想を抱いていたのであった。いずれにせよ、中国側史料をアプリアリに使用する経験は、かなり多くの同業者が経験していたのではないだろうか。

さて、このような思いを巡らせながら、南京事件期に関する中国側の史料や研究を読んでいくと、背筋が寒くなったことも、一度ならずあった。次に、中華人民共和国において発表された「略奪」関連の研究に、話題を転換させていきたい。

大半の研究者がそうであるように、地道な努力の継続がなんらかの成果を生み出す母胎である。この意味においては、1980年代半ばから1990年代初めの中国の場合も、時間をかけた仕事とわかる労作が多く見られる。基本的工具書となるような書籍、すなわち楊宝華・韓徳昌による「解放」前中国図書館の年表 [E-⑥]、鄒華亭・施金炎による類似した仕事 [E-⑨] などが、次第に誕生したのである。

研究面では、李朝先・段克強の通史などでも、台湾の研究では当然ながら論及されることがなかった、中国共産党支配地域における図書館簡史も見られ、便利な概説となっている。略奪問題に関しては、嚴文郁の先行研究 [E-②] に全面的に依拠して「損害」のみを論じるが、他方で満鉄図書館などに対しては、「中国の政治・経済・資源・文化など各種情報・資料の窃盗を目的とした特務組織であり、こうした組織でも図書館を自称していた」と手厳し

い [E-⑩, 306頁]。中国側には彼ら独自の評価があって当然であり、出典がほとんど書かれていない点が惜しまれるが、初期の成果としては相応の評価が下されるだろう。

また、1994年に発表された農偉雄・関建文の論考は、全体的には『中国図書館協会会報』を多用した通史的考察であり、松本剛の論文 [D-⑫] など適切に引用している。しかし、こと南京での略奪部分になると、次のような記述が見られるのである。

1938年3月、日本は国内から膨大な人数の“科学考察団”を派遣し、中国南方各省で“考察”をすすめた。この団体は各方面の専門家から組織され、この中には図書館学と版本・目録学の専門家3人が含まれていた。南京一カ所だけで、彼らは文化機関72カ所を調査し、スパイ人員（原文では「特工人員」）は7000人以上、労務者が800人、トラック810台を動員して、88万冊の図書類を「接收」した。全“考察”期間において日本へ持ち帰った書籍は、当時の日本最大の図書館—帝国図書館の蔵書よりもさらに多かった [E-⑫, 99頁]。

これは明らかに、先に見た趙建民による論点(a) [E-⑰, 38頁] の母胎であり、では農・関は何を根拠にかかる主張を行っているのかを調べると、趙燕群の研究 [E-⑧] に辿り着く。少しその論点を追ってみよう。

趙燕群はこの出来事に対して、次のような叙述を行っている。

淪落区では、日本帝国主義が狂ったようにわが国の貴重な文化財・図書を略奪し、いわゆる“科学調査団”なるもの（日本の各種科学者からなり、図書館学や版本学の者も含まれていた）が、至る所で強奪活動を進めた。日本の憲兵と警察は、各図書館を捜査すると、およそ進歩的な書籍は全て燃却し、貴重な文化財・図書は持ち去った。南京は当時の国民党中央政府の所在地で、中央研究院・中央図書館・国学図書館、及び政府各部門には大量の図書・文献が収蔵さ

れていた。南京陥落後、大量の図書・文献は、日本侵略者の略奪対象となったのである。日本の新聞『赤旗』1986年8月17日の記事が暴露するには、当時の日本軍の上海派遣軍特務部長が“ただちに南京市内の重要な図書を検査し、接收を準備せよ”と命令を発した。そこで、人員を派遣して南京において重要な書籍・文献がありそうな場所を合計70カ所余り捜査した。スパイ人員・兵士が700人近く派遣され、雇った労務者は800人以上、トラックを延べ310台用い、1ヶ月の時間を費やし、88万冊の図書を日本へ持ち運んだ〔E-⑧, 288頁〕。

人数など細かい点を見ていくと、ゼロがひとつ増えるなど大幅な相違があるものの、88万冊を日本に持ち帰ったという衝撃的論点は、ここに誕生したと見て良いだろう。さらに、『赤旗』の報道〔D-⑥〕が、かかる「事実」の論拠とされている点にも、注目する必要があるだろう。

果たして中国における他の研究は、この問題をどのように扱っているのか、さらに調査を継続した。その結果、驚きを通り越して呆然とするような事態の展開に、一瞬絶句した次第である。以下、その概要を整理してみたい。

孟国祥の研究は、一次史料も多用した比較的良質な内容である。しかし、この部分になると記述は全て『赤旗』〔D-⑥〕に依拠して進められ、青木実の証言を用いながら、接收時の状況を紹介している。そして結果的に、「文化大虐殺」に関与した人員は、スパイ（特工）230人、兵士367人、苦力830人であり、トラック延べ310台も動員された。収奪した図書・文献は88万冊に達したのであった」とした〔E-⑯, 494～495頁〕。

また、実証研究で名高い孫宅巍の研究でも、同じ出典を用いて、「青木石」の証言（実も石も、中国語の発音はshiであるため、誤記したのでであろう）として、南京市内の図書を調査し終えた後、日本軍は「スパイ330人、兵士367人を動員、さらに苦力830人を徴用し、延べ310台のトラック」を用いて、「88万冊の図書と文献」を略奪したという〔E-⑱, 358～359頁〕。

しかしこの二人の場合は、これ以上のことは主張していない。つまり、88万冊の行方に関しては、何も述べていないのである。むしろ危惧すべきは、戦時の大規模「略奪」という重大な論点にもかかわらず、新聞報道という二次文献にのみ依拠した安直な姿勢に所在しているのではないだろうか。

近年の劉惠恕の場合は、やはり『赤旗』に依拠しつつ、「……25人の専門家を用いて整理・分類した図書文献は、880,399冊であり、うち善本が42万冊、これには宋版400種類余り、さらに『清朝歴代皇帝実録』3,000冊余り、10組の完全な『古今図書集成』等が含まれており、日本へ運ばれていった」と主張し〔E-⑳, 183～184頁〕、こうみると「略奪」した上に「日本国内へ持ち帰った」という見解が、数からすれば優勢になりそうな気配なのである。

そして趙建民の場合は、こうした『赤旗』一辺倒ではなくて、一見すると数多くの文献を使用しており、特に素人にとっては説得力があるように思われるだろうから、最も始末が悪いだろう。すなわち、論点(b)〔E-㉑, 245頁〕は、それ以前の論理的展開から必然的に導き出される見解であるものの、日本側の具体的搬入先まで明示した論点(c)〔E-㉒, 241～242頁〕は、原文に註こそ記されていないが、明らかに松本剛からの剽窃である。しかも松本は、次のように記しているに過ぎない。

日本国内における図書利用の変化は、中国やアジア研究を中心課題とする東洋文化研究所（東京帝大、1941年）、東亜経済研究所（東京商大、1942年）、東亜風土病研究所（長崎医大、1942年）、大東亜図書館（1942年）、民族研究所（1943年）等の設立に表れている。戦時下で、国内では図書館業務などは戦時の必要に合わないものだというような非難もあったなかで、政府は中国やアジアを専門に研究するための機関を設立し、それに必要な図書に金を使っているのである。このことは、中国図書やアジア関係の研究書の入手をいかに重視していたかを表している。

しかもその前段階には、「……中国図書の日本搬

入は日中戦争の開始期ではなくて、太平洋戦争開始後に始まり、終末期まで続いている。もし、中国図書を当初から日本に搬入するつもりであれば、図書文献^{リテラチャー}接收委員会が集めた本をすべて日本に送ることも可能だった筈である。それをしないで、太平洋戦争開始後になってから搬入を始めたというのはどういう事情であろうか」と、丁寧な問題提起が明示された上での議論である [D-⑮, 93～96頁]。

これは最早、盗作を超えた創作の領域に達している。恐らくは姉妹校の関係を通じて、大阪経済大学から復旦大学へと届けられた労作は、かくも無造作に改竄され、新しい「南京神話」の創出に貢献していたのだ。趙建民の論考の中に、類似した創作、否史実の捏造を発見することは、たいへん容易な作業である。しかし、個人攻撃が本稿の目的ではないので、そろそろ結論を急ぎたいと思う。

5. おわりに

これまでの追跡作業を通じて、近年の中国側に跳梁している南京事件期の図書大略奪という見解が、基本的にみな『赤旗』の報道に依拠したものである事実が判明した。そして次なる問題は、本当に『赤旗』記事の中に、上述したような内容が書かれているのかという点に所在する。

記事の中では、先ず『業務概況』を引用しながら、「『南京市内の重要図書を検分し、接收に備えよ』との命令を受け9人の軍特務部員が3台の自動車です市内を走りまわっていました」との記述が見られる [D-⑥, 右側第4段]。ついで、接收作業に要した人員として、「特務員のべ330人、兵隊のべ367人、苦力のべ830人、トラックのべ310台」と明記されている [D-⑥, 右側第5段]。実は、この箇所には大きな問題が潜伏しているのではないか。すなわち、『業務概況』では「9名の接收員は3台の自動車に分乗し……」とあり [B-⑳, 8頁]、また動員内容については「接收員の延人員は330名、兵員延人員は367名、苦力延人員830名、トラック延台数は310台」とある [B-㉑, 10～11頁]。

つまり、原史料には書かれていない「特務部員」乃至「特務員」によって、本来の「接收員」が置換

されたことにより、同じ漢字を用いているがゆえに、中国側はこれを「スパイ（特工）」と性急に断定した。しかしながら、軍隊用語における「特務部」とは、謀略活動以外にも幅広い職務を担当する組織であり、「特務機関」と等式で結ぶことは不可能である⁹⁾。さらに、この作業に関わった人物も、筆者による調査によって、ほぼ全員身元が判明した（表1、及び表2を参照）。上海自然科学研究所・満鉄上海事務所・東亜同文書院に勤務する民間人が、特務部の依頼によってこの仕事に従事したのであって、「特務部員」は常時1～2名が名義上関わっていたにすぎないのである¹⁰⁾。この点は、無署名の『赤旗』記者が犯した、最大のフライングであろう。

もうひとつ、記事に登場するただ一人の当事者である青木実は、彼が既に自伝的な作品で述べたこと以上の発言は、おこなっていない。むしろ、日本への持ち運びの可能性を強く示唆したのは、一連の出来事とはなんら関係を持たない第三者であり、その後も思わせぶりの発言を繰り返してきた、山崎元なのであった [D-⑥, 左側第2～3段]。

このように追跡すると、以下のような総括が可能であると思われる。中国側で現在、横行し始めたかに見受けられる「曲論」は、途中で幾つかの媒介を経過して、延べ数の概念が実数に入れ替わるなどの変遷を遂げているものの、基本的には『赤旗』における事実の誤認、あるいは捏造に系譜的な起源を有するものである。動員人数などが大幅に変化していくのは、恐らく「伝言ゲーム」と類似した現象が、孫引きや再引用を繰り返す内に発生したものと考えられる¹¹⁾。

しかし趙建民に見られるような、日本側研究における都合の良い部分だけを恣意的に利用し、本来の筆者の意図とは正反対の結論をでっち上げてしまう「学者」も、悲しいことに出現してしまった。この点に関しては、1980年代半ばに、十分な実証作業を経ずして大胆な発言を公表した幾人かの日本人研究者も、道義的には責任の何割かは負う必要があるだろう。国際的にも敏感な問題に対して、曖昧な発言はたいへんに危険である。

幸いなことに、近年になってようやく、戦争と文化を取りまく問題に対して、わが国の歴史学者が本

格的に取り組むようになってきた[D-⑱, D-⑳, D-㉑]。そう遠くない将来, より厳密なる学問的態度を堅持することこそが, 日本とアジアの歴史認識を相互に認め合うための, 必要条件になっていくだろう。以上, 曲論の跋扈とその系譜に対する考察によって, 歴史家が保持すべき基本的な姿勢を確認した。これを以て自戒としたい。

註

- 1) 近年の朝鮮民主主義人民共和国における歴史の「発見」問題については, 鏗木昌之『北朝鮮—社会主義と伝統の共鳴』(東京大学出版会, 1992年), 及び和田春樹『北朝鮮—遊撃隊国家の現在』(岩波書店, 1998年)などを参照されたい。
- 2) この問題に対して, 筆者は既に次の初歩的な分析をおこなっている。史料発掘と執筆を同時並行的に進めているため, 多少の重複部分もあるが, あわせて参照していただければ幸甚である。①金丸裕一「中支建設資料整備委員会とその周辺—『支那事変』期日本の対中国調査活動をめぐる習作」(『立命館経済学』49-5, 2000年); ②同「戦時日方掠奪図書問題述評」(『辛亥革命九十週年国際学術討論会論文集』近代中国出版社, 2002年近刊予定); ③同「近現代史研究と『語意』の変遷について—『特務』概念をめぐる日中間の相剋」(『ポリグロシア』6, 立命館アジア太平洋大学言語教育センター, 2002年); ④「文化政策と占領地支配—中支建設資料整備委員会を中心に」(ハーバード大学日中関係史研究会提出論文, 英文, 2002年)。
- 3) 水谷尚子・金丸裕一「台湾で開催された『南京大虐殺60周年学術研討会』に参加して」(『季刊戦争責任研究』20, 1998年)を参照されたい。
- 4) こうした史料は, 小野賢二・藤原彰・本多勝一編『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち—第十三師団山田支隊兵士の陣中日記』(大月書店, 1996年)などに確認される以外にも, 南京戦史編集委員会編『南京戦史資料集』1・2(偕行社, 1993年増補改訂), あるいは阿羅健一編『「南京事件」日本人48人の証言』(小学館, 2002年……原著は『聞き書 南京事件』と題して1987年に図書出版社より刊行)などにも収録されている。
- 5) 趙建民は1938年1月生まれ。1964年に復旦大学歴史学部アジア・アフリカ歴史学科卒, 同校に就職して現在は歴史系教授。日本研究センターと韓国研究センターの研究員を兼任し, 上海中日関係史研究会常務副会長兼秘書長, 中国日中関係史学会理事なども務めている(中華日本学会・北京日本研究中心監修『中国的日本研究』世界知識出版社, 1999年, 409頁)。
- 6) こうした「疎開」の具体的事例として, 次の文献

がたいへん興味深い。国立故宮博物院編・温井禎祥訳『故宮七十星霜』(国立故宮博物院, 1996年), また呂芳上「中央研究院近代史研究所檔案の典藏与運用」, 邵銘煌「中国国民党中央委員会党史委員会史料之典藏与運用」(ともに『近代中国歴史档案研討会論文集』國史館, 1998年に収録)。

- 7) 筆者は未見であるが, 戦後の台湾では次の文献が公表されている様である。張錦郎「抗戦期間的図書館事業」(『図書館学報』9, 1968年), 嚴文郁「国立羅斯福図書館籌備紀実」(同上), 包遊彭「博物館学」(正中書局, 1970年), 蔣復璁「抗戦四年来的図書館事業」(『国立中央図書館刊』新7-2, 1974年), 同「運帰国立北平図書館存美善本概述」(『中美月刊』11-3, 刊行年調査中), 昌彼得「国立中央図書館簡史」(『教育与文化月刊』351-352, 刊行年調査中)。
- 8) 一連の復刻版は, 「日本植民地文化運動資料」として, 緑蔭書房から刊行されている。
- 9) この点については, 註2)の③において詳細に検討しておいた。
- 10) やはり, 註2)の拙稿①, ②, ④を参照されたい。
- 11) 1980年代後半における日本共産党と中国共産党の関係を考えると, 両党間で直接機関紙がやりとりされた可能性は低いと思う。中国側研究が共通して『赤旗』を引用している事実は, この記事が内部発行の刊行物などに中国語訳されて出まわっている可能性も示唆する。しかし仮にそうだととしても, 翻訳の妥当性など, 現時点においては検証することができないので, 後日の調査に譲りたい。

参考史料・文献一覧表

凡例

- ① ここに収録した史料や文献は, 筆者がこれまでに蒐集・閲覧した範囲に限定されており, 未見のものは含めなかった。よって, 必ずしも網羅的な目録ではない。配列は, 刊行年月順とした。
- ② 一次史料・二次史料には, 一部に復刻された文献に収録されているものも含めておいたが, この場合には出典を明記してある。また, 当事者のインタビューや回想録などは二次史料に含めてある。
- ③ 戦後の日本語文献と中国語文献は, 研究論文・図書を中心としたが, 明らかに当事者ではない第三者による間接的な回想録などは, ここに含めた。
- ④ 本文中における引用や紹介は, 例えば [(C)-②] というように, 原則として記号を用いて示した。

(A) 一次史料

- ① 軍特務部占領地区内学術資料接收委員会「南京ニ於ケル接收資料(學術標本等)ノ第一次整理要綱」1938年7月16日(防衛庁防衛研究所所蔵 陸軍/陸支密大日記/S13-27「中支占領地域ニ於ケル図書標本類接收整理ニ関スル件報告」軍特務部長原田熊吉發陸軍次官東條英機宛, 1938年10月20日に収録)

- ② 上海自然科学研究所「軍特務部占領地区学術資料委員会報告」1938年8月31日（同上）
- ③ 上海自然科学研究所「軍特務部占領地区学術資料委員会 第二報告」1938年9月30日（同上）
- ④ 満鉄上海事務所・自然科学研究所・東亜同文書院「占領地区図書文件接收委員会ニ関スル中間報告」1938年4月（同上）
- ⑤ 「占領地区図書接收委員会南京図書接收報告」日時不明（同上）
- ⑥ 軍特務部占領地区図書文件接收委員会「接收図書文件整理要綱」1938年6月6日決定（同上）
- ⑦ 軍特務部占領地区図書文件接收委員会「南京地質調査所集積図書文件類整理要綱」1938年6月6日決定（同上）
- ⑧ 満鉄上海事務所・東亜同文書院・自然科学研究所「軍特務部占領地区図書文件接收委員会報告」1938年8月31日（同上）
- ⑨ 「対支院設置ニ伴フ文化事業移管ノ件」1938年（外務省外交史料館所蔵外交文書H.7.2.0.4-8「参考資料関係雑件興亜院関係」に収録）
- ⑩ 「昭和十四年度興亜院所管文化事業費歳出予定計画書」（同上）
- ⑪ 「対支文化政策ニ就テ」（一）、外務省文化事業部、1939年2月1日（防衛庁防衛研究所所蔵 陸軍省大日記類/乙輯「『対支文化政策ニ就テ』送付ノ件」外務次官沢田廉三發陸軍次官山脇正隆宛、1939年2月23日に収録）
- ⑫ 「対支文化政策ニ就テ」（二）、外務省文化事業部、1939年2月21日（防衛庁防衛研究所所蔵 陸軍省大日記類/乙輯「『対支文化政策ニ就テ』②送付ノ件」外務次官沢田廉三發陸軍次官山脇正隆宛、1939年3月14日に収録）
- ⑬ 呂集団司令部「廬山押収図書目録」1939年5月20日（防衛庁防衛研究所所蔵 陸軍/陸支密大日記/S14～74「廬山押収図書目録送付ノ件報告」呂集団參謀長沼田多稼蔵發陸軍次官山脇正隆宛、1939年6月7日に収録）
- ⑭ 「南京花輪総領事發有田外務大臣宛第185号」1940年5月21日（外務省外交史料館所蔵外交文書L1.6.1.2「各国図書館関係雑件」に収録）
- ⑮ 「行政院第五十二次會議録」1941年3月25日（中国第二歴史檔案館編『汪偽政府行政院會議録』檔案出版社、1992年、6巻に収録）
- ⑯ 「行政院第五十五次會議録」1941年4月15日（同上）
- ⑰ 「行政院第六十次會議録」1941年5月20日（同上、7巻）
- ⑱ 「行政院第七十七次會議録」1941年9月16日（同上、9巻）
- ⑲ 「行政院第七十九次會議録」1941年9月30日（同上）
- ⑳ 「行政院第一〇五次會議録」1942年3月31日（同上、12巻）
- ㉑ 「行政院第一〇八次會議録」1942年4月21日（同上）
- ㉒ 「押収書籍還送相成度件」工政課、1942年5月（防衛庁防衛研究所所蔵 陸軍/陸支密大日記/S17～18）
- ㉓ 「行政院第一二二次會議録」1942年8月4日（前掲『汪偽政府行政院會議録』、14巻）
- ㉔ 「行政院第一六〇次會議録」1943年5月4日（同上、19巻）
- ㉕ 「行政院第二六一次會議録」1945年7月31日（同上、31巻）
- (B) 戦時期の二次史料
- ① 「支那事変中ニ於ケル文化界ノ動勢（特ニ中国新聞紙ニ報ゼラレタル教育界ノ消息）」（『中国文化情報』4、上海自然科学研究所、1937年12月）
- ② 黒屋政彦「戦禍の跡を訪ねて」（『自然』6、上海自然科学研究所倶楽部学芸部、1937年12月）
- ③ 陶秀夫「倭寇禍京始末記」（『南京文献』1、南京市通史館、1938年1月）
- ④ 「中国各大学及ビ専科学校ノ現状」（『中国文化情報』5、1938年2月）
- ⑤ 「事変後に於ける研究並に一般文化機関」（『中国文化情報』6、1938年4月）
- ⑥ 「戦区に於ける蔵書及び古物」（『中国文化情報』6、1938年4月）
- ⑦ 「中支戦区内に於ける文化財の保存工作」（『中国文化情報』7、1938年5月）
- ⑧ 「事変と漢籍」（『書香』105、満鉄大連図書館、1938年5月）
- ⑨ 「中支戦区内に於ける文化財の保存工作（続）」（『中国文化情報』8、1938年6月）
- ⑩ 新城新蔵「方針」（『自然』7、1938年6月）
- ⑪ 「大佐、青木両氏南京へ出張」（『書香』108、1938年8月）
- ⑫ 大佐三四五「占領地区に於ける図書文献の接收と其整理作業に就て」（『書香』110、1938年10月）
- ⑬ 青木実「接收図書整理雑感」（同上）
- ⑭ 大塚令三「南京に於ける接收文献の整理工作—占領地区図書文件接收委員会総報告」（『満鉄資料彙報』3-10、1938年10月）
- ⑮ 「中支戦区内に於ける文化財の保存工作（続）」（『中国文化情報』12、1938年11月）
- ⑯ 「中支考古学調査班松本班報告」（『史学』17-2、慶應義塾大学文学部三田史学会、1938年11月）
- ⑰ 大佐三四五「占領地区に於ける図書文献の接收と其整理作業に就て」（『図書館雑誌』32-12、1938年12月）
- ⑱ 波多野乾一「支那学者の徴用」（『東京朝日新聞』1938年12月20日）
- ⑲ 松本信広「新城博士と南京の古物保存事業」（『自然』8、1939年3月）
- ⑳ 松本信広「江南訪古記」（『史学』17-4、1939年7月）
- ㉑ 柴田常恵「支那旅行記」（同上）
- ㉒ 松本芳夫「中支遊記」（『史学』18-1、1939年9月）
- ㉓ K.Y.生「上海タヨリ」（『図書館研究』12-3、青年図書館員同盟、1939年10月）

- ②④ X. Y. Z 「支那ノ正解ニ努メヨ」(『図書館研究』12-4, 1939年12月)
- ②⑤ 大内隆雄「本のある支那風景」(『収書月報』47, 満鉄奉天図書館, 1939年12月)
- ②⑥ 榎一雄・市古宙三「支那に於ける文献ノ現存状態」(『東亜論叢』2, 東京文求堂, 1940年1月)
- ②⑦ 「図書標本類接收整理」(『新支那現勢要覧 第二回 昭和十五年版』東亜同文会業務部, 1940年1月)
- ②⑧ 橋島善次郎「上海タヨリ 戦後の上海図書館概況」(『図書館研究』13-1, 1940年1月)
- ②⑨ 森生「上海タヨリ」(『図書館研究』13-3, 1940年7月)
- ③⑩ 福島正夫「第一次北支旅行日誌」昭和15年8月16日~9月20日(『福島正夫著作集』7, 勁草書房, 1993年12月に収録)
- ③⑪ 西村捨也「上海ニ於ケル図書館ノ現況」(『図書館研究』13-4, 1940年10月)
- ③⑫ 「国民政府宣伝部の新蒐書工作」(『図書館雑誌』34-12, 1940年12月)
- ③⑬ 大塚令三「南京に於ける接收文献の整理工作—主として編訳部業績の紹介」(『東亜問題』22, 1941年1月)
- ③⑭ 西村捨也「上海ニ於ケル図書館補遺」(『図書館研究』14-1, 1941年1月)
- ③⑮ 「業務概況」(中支建設資料整備委員会, 1941年3月)
- ③⑯ 「中支の文化諸施設を国民政府に移管」(『図書館雑誌』35-4, 1941年4月)
- ③⑰ 橋島善次郎「南京, 上海, 杭州ニ於ケル図書ノ蒐集ト整理—中支建設資料整備委員会保管図書ノ国民政府へ返還マデ」(『図書館研究』14-4, 1941年4月)
- ③⑱ 「中支文化諸施設返還」(『外交時報』873, 1941年4月)
- ③⑲ 岡田芳三郎・澄田正一「南京中華門外雨花台の六朝古墓」(『史林』26-3, 1941年7月)
- ④⑩ 「文化華北に還る一軍管理の図書三十万冊」(『図書館雑誌』35-8, 1941年8月)
- ④⑪ 市来義道編『南京』(南京日本商工会議所, 1941年9月)
- ④⑫ 杉本忠「華北華中旅行日誌」(『史学』20-2, 1941年11月)
- ④⑬ 国民政府宣伝部「日華条約一年來の文化事業の進展(続)」(『日文国民政府彙報』79, 中国和文出版社, 1942年1月〇日)
- ④⑭ 「文物保管委員会図書館と博物館の開放式典」(『日文国民政府彙報』117, 1942年7月4日)
- ④⑮ 汪国民政府主席「文物は国家, 民族の精華」(『日文国民政府彙報』119, 1942年7月12日)
- ④⑯ 「援蔣図書の利用」(『図書館雑誌』36-7, 1942年7月)
- ④⑰ 「文物保管委員会(南京)は呼びかける」(『図書館雑誌』36-9, 1942年9月)
- ④⑱ 富永牧太「戦時支那ノ図書館管見」(『図書館研究』15-4, 1942年10月)
- ④⑲ 梅原末治「支那青銅器時代再論」(『史林』27-4, 1942年10月)
- ⑤⑩ 「図書援蔣の終幕」(『図書館雑誌』36-10, 1942年10月)
- ⑤⑪ 「新国民政府の文化事業發展概況」(『中国文化情報』31, 1942年12月)
- ⑤⑫ 幼方直吉「上海文化の遺産—主として外国系の図書館について」(『書香』145, 1943年4月)
- ⑤⑬ 増田廉吉「中支那の散見」(『図書館雑誌』37-6, 1943年6月)
- ⑤⑭ 「華中敵産の第二次移管」(『日文国民政府彙報』201, 1943年10月29日)
- (c) 戦後期の二次史料
- ① 文部省大臣官房文書課編『終戦教育事務処理提要』1~4, 文部省, 1945~1950年)
- ② 韓啓桐『中国対日戦時損失之估計(1937-1943)』中華書局, 1946年)
- ③ 「中華民國よりの掠奪文化財総目録」外務省特殊財産局, 刊行年不明)
- ④ 「在日辦理賠償婦還工作綜述」初稿上・下(中華民國駐日代表團日本賠償及婦還物資接收委員會編, 1949年)
- ⑤ 梅原末治『考古学六十年』(平凡社, 1973年)
- ⑥ 長沢規矩也「古書・図書館と私」(長沢規矩也『古書のはなし—書誌学入門』富山房, 1977年)
- ⑦ 阿部洋編『インタビュー記録 上海自然科学研究所 E.日中文化摩擦』(特定研究「文化摩擦」E-2, 1980年)
- ⑧ 杭立武『中華文物播遷記』(台湾商務印書館, 1980年)
- ⑨ 上海満鉄会編『長江の流れと共に—上海満鉄回想録』(上海満鉄回想録編集委員会, 1980年)
- ⑩ 青木実『旅順・私の南京』(作文社, 1982年)
- ⑪ 伊藤武雄・岡崎嘉平太・松本重治『われらの生涯のなかの中国』(みすず書房, 1983年)
- ⑫ 「杭立武先生訪問記録」(中央研究院近代史研究所, 1990年)
- ⑬ 井村哲郎編『満鉄調査部—関係者の証言』(アジア経済研究所, 1996年)
- ⑭ 「蔣復璁口述回憶録」(中央研究院近代史研究所, 2000年)
- (d) 戦後期の日本語文献
- ① もり・きよし「在滬八年・一切是空」(『図書館雑誌』59-8, 1965年)
- ② 加藤祐三「科学者の戦争責任と文化財の略奪」(『龍溪』4, 1972年)
- ③ 小島晋治・さねとうけいしゅう・加藤祐三「中国から「略奪」した研究資料の処理について」(『日中』2-12, 1972年)
- ④ さねとう けいしゅう「中国図書返還問題」(『図書館雑誌』74-8, 1980年)
- ⑤ 安達将孝「第一, 第二次世界大戦中における日本軍接收図書」(『図書館界』33-2, 1981年)
- ⑥ 「もう一つの南京“大虐殺”/日本軍が中国の88

- 万冊の図書奪う」（『赤旗（日曜版）』1986年8月17日）
- ⑦ 山崎元「南京大屠殺のかげで大略奪」（『前衛』539, 1986年）
- ⑧ 山崎元「『隠された聯隊史』と文化財—南京で起きたもう一つの“大屠殺”」（『赤旗』1988年2月24日）
- ⑨ 岡村敬二「戦時下中国の接收資料について」（『大阪府立図書館紀要』27, 1991年）
- ⑩ 山崎元「南京事件と図書館略奪」（『文化評論』366, 1991年）
- ⑪ 山崎元「発掘・昭和史のはざままで」（新日本出版社, 1991年）
- ⑫ 松本剛「略奪した文化」上・下（『世界』573・574, 1992年）
- ⑬ 小黒浩司「日中国書館界交流の歴史」（『図書館雑誌』86-8, 1992年）
- ⑭ 加藤一夫「日本の近代図書館史を総括する—旧植民地図書館の調査・研究に寄せて」（加藤一夫『情報社会の対蹠地点—図書館と幻想のネットワーク』社会評論社, 1992年）
- ⑮ 松本剛『略奪した文化』（岩波書店, 1993年）
- ⑯ 岡村敬二「遺された蔵書—満鉄図書館・海外日本図書館の歴史」（阿吡社, 1994年）
- ⑰ 佐伯修「上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争」（宝島社, 1995年）
- ⑱ 殷燕軍「中日戦争賠償問題」（御茶の水書房, 1996年）
- ⑲ 鈴木良「文化財の誕生」（『歴史評論』555, 1996年）
- ⑳ 鈴木良「近代日本文化財問題研究の課題について」（『歴史評論』573, 1998年）
- ㉑ 村上美代治「歴史のなかの満鉄図書館—図書館活動の構図と原動力」（私家版, 1999年）
- ㉒ 神戸輝夫「日中戦争における文化侵略」(1)（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』22-2, 2000年）
- ㉓ 金丸裕一「中支建設資料整備委員会とその周辺—「支那事変」期日本の対中国調査活動をめぐる習作」（『立命館経済学』49-5, 2000年）
- (E) 戦後期の中国語文献
- ① 張錦郎・黄淵泉編『中国近六十年来図書館事業大事記』（台湾商務印書館, 1974年）
- ② 嚴文郁「中国図書館発展史—自清末至抗戰勝利」（中国図書館学会, 1983年）
- ③ 蘇精「抗戰時秘密搜購淪陷区古籍始末」（蘇精『近代蔵書三十家』伝記文学出版社, 1983年）
- ④ 張錦郎「抗戰期間的図書館事業」（張錦郎『中国図書館事業論集』台湾学生書局, 1984年）
- ⑤ 王聿均「戦時日軍对中国文化的破壊」（『中央研究院近代史研究所集刊』14, 1985年）
- ⑥ 楊宝華・韓徳昌編『中国省市図書館概況（1919-1949）』（書目文献出版社, 1985年）*
- ⑦ 遲景德「中国対日抗戰損失調査史述」（國史館, 1987年）
- ⑧ 趙燕群「国民党統治時期的圖書和圖書館事業」（謝灼華編『中国圖書和圖書館史』武漢大学出版社, 1987年）*
- ⑨ 鄒華亭・施金炎『中国近現代圖書館事業大事記』（湖南人民出版社, 1988年）*
- ⑩ 李朝先・段克強『中国圖書館史』（貴州大学出版社, 1992年）*
- ⑪ 浙江省図書館志編纂委員会編『浙江省図書館志』（中国書籍出版社, 1994年）*
- ⑫ 農偉雄・関建文「日本侵華戦争对中国圖書館事業的破壞」（『抗日戦争研究』13, 1994年）*
- ⑬ 孟国祥・喻徳文『中国抗戰損失与戦後索賠始末』（安徽人民出版社, 1995年）*
- ⑭ 孫宅巍『鐘山硝煙—南京保衛戰紀実』（河南大学出版社, 1995年）*
- ⑮ 孟国祥「南京文物的劫難」（中共中央党史研究室科研管理部編『日軍侵華罪行紀実』中共党史出版社, 1995年）*
- ⑯ 王振鵠「第六章 文化服務機構 第一節 圖書館」（『中華民國文化史（初稿）』（國史館, 1987年）
- ⑰ 趙建民「抗戰期間日本对中国文化財產的破壞和掠奪」（『档案与史学』2, 1997年）*
- ⑱ 孫宅巍主編『南京大屠殺』（北京出版社, 1997年）*
- ⑲ 程煥文『中国圖書館学教育之父—沈祖榮評伝』（台湾学生書局, 1997年）*
- ⑳ 劉惠恕「南京大屠殺新考」（上海三聯書店, 1998年）*
- ㉑ 趙建民「略論『南京大屠殺』中的圖書劫掠」（『中国現代史專題研究報告』20, 中華民國史料研究中心, 1999年）*
- [この項目の中で、*を付けた研究は中華人民共和国における成果である]
- (附記) 本稿は、2001年度及び2002年度立命館アジア太平洋大学研究助成による成果の一部である。毎度の事ながら、大分大学経済学部経済研究所、大分県立図書館、滋賀大学経済学部経済経営研究所には、学外者であるにも関わらず、文献収集の過程でたいへんお世話になっている。また、京都大学総合図書館、早稲田大学中央図書館、立命館大学国際平和ミュージアム、コロンビア大学東アジア図書館の蔵書も、大いに利用させていただくことができた。特に記して、関係各位に深謝申し上げたい。

表1 図書文件接收委員会の実働構成員（職務は1937年前後）

特務部関係者

- 1 佐方繁木（さかた・しげき）
…幹事長（1937.12.8～12.14），上海派遣軍司令部付少佐
- 2 桜庭子郎（さくらば・しろう）
…幹事長（1937.12.14～1938.2.28），陸士第25期
- 3 楠本実隆（くすもと・さねたか）
…幹事長（1938.3.1～8.31），中支那派遣軍司令部付大佐
- 4 渡部久（わたべ・ひさし）
…委員（1937.12.8～12.14），経歴など不明
- 5 林卓（はやし・すぐる）
…委員（1938.6.6～8.31），経歴など不明
- 6 合原忠（ごうはら・ただし）
…臨時手伝い（1938.8.1～8.31），経歴など不明

満鉄関係者

- 7 夷石隆寿（いしし・たかひさ）
…幹事（1937.12.8～12.21），上海事務所調査課通商係主任
- 8 天野元之助（あまの・もとのすけ）
…幹事（1937.12.21～1938.3.4），上海事務所調査課産業係主任，まもなく調査役
- 9 大塚令三（おおつか・れいぞう）
…幹事（1938.3.4～8.31），上海事務所調査課資料係主任
- 10 山上金男（やまがみ・かねお）
…委員（1938.12.8～1938.3.4），上海事務所調査課勤務
- 11 林田和夫（はやしだ・かずお）
…委員（1937.12.8～1938.3.4），上海事務所調査課通商係勤務，中支派遣軍特務部囑託
- 12 的場泰雄（まとば・やすお）
…委員（1937.12.8～1938.6.6），経歴など不明
- 13 徐炳南（Xu Bingnan）
…委員（1938.6.6～8.31），東亜同文書院第24期卒業生
- 14 津田義雄（つだ・よしお）
…委員（1938.3.4～5.30），経歴など不明
- 15 長沢武夫（ながさわ・たけお）
…委員（1938.5.30～8.31），上海事務所勤務，後に中支建設資料整備事務所に出向
- 16 津田六郎（つだ・ろくろう）
…委員（1938.5.30～8.31），経歴など不明
- 17 査士元（Cha Shiyuan）
…満鉄囑託
- 18 小島友宇（こじま・ともお）
…満鉄南京支所勤務

- 19 原田祐四郎（はらだ・ゆうじろう）
…満鉄調査部資料課勤務
- 20 吉植悟（よしうえ・さとる）
…満鉄調査部資料課勤務，後に満鉄調査部事件で検挙される
- 21 田中清（たなか・きよし）
…満鉄調査部資料課勤務
- 22 大佐三四五（おおさ・みよご）
…書誌学者，満鉄大連図書館書目係主任
- 23 青木実（あおき・みのる）
…満鉄大連図書館司書
- 24 与謝野麟（よさの・りん）
…満鉄奉天図書館勤務

東亜同文書院関係者

- 25 福崎峰太郎（ふくざき・みねたろう）
…幹事（1937.12.8～1938.8.31），第19期生で後に中支建設資料整備事務所に勤務
- 26 中馬靖友（ちゅうま・やすとも）
…委員（1937.12.8～1938.8.31），第27期生で華中鉄鉱に入社
- 27 棚島善次郎（ぬでしま・ぜんじろう）
…委員（1937.12.8～1938.8.31），1936年3月文部省図書館講習所卒業，同文書院司書
- 28 寺田義三郎（てらだ・ぎさぶろう）
…委員（1937.12.8～1938.8.31），経歴など不明
- 29 小竹文夫（こたけ・ふみお）
…委員（1938.6.6～8.31），第19期生で東亜同文書院教授，後に東京教育大学教授
- 30 瀬尾彦次郎（せお・ひこじろう）
…第34期卒業生，江商（ごうしょう）上海支店勤務
- 31 原光次（はら・こうじ）
…経歴など不明
- 32 大森毅（おおもり・つよし）
…経歴など不明
- 33 野田久太郎（のだ・ひさたろう）
…第35期生在学中
- 34 稲野達郎（いなの・たつろう）
…第38期生在学中
- 35 市村克孝（いちむら・かつたか）
…第36期生在学中
- 36 山元静雄（やまもと・しずお）
…第37期生在学中
- 37 松浦春男（まつうら・はるお）
…第37期生在学中

上海自然科学研究所関係者

- 38 福岡重蔵（ふくおか・しげぞう）

- …幹事 (1937.12.8～1938.8.31), 東亜同文書院第20期卒業生で事務所書記
- 39 上野太忠 (うへの・たいちゆう)
…委員 (1937.12.8～1938.8.31), 東亜同文書院第11期卒業生で事務所副主事
- 40 梅田潔 (うめだ・きよし)
…委員 (1937.12.8～1938.8.31), 東亜同文書院第27期卒業生で事務所書記
- 41 西村捨也 (にしむら・すてや)
…委員 (1937.12.8～1938.8.31), 文部省図書館講習所卒で研究所図書館司書
- 42 宮地正吉 (みやじ・しょうきち)
…研究所技術員
- 43 外山八郎 (とやま・はちろう)
…研究所技術員
- 44 上野有造 (うへの・ゆうぞう)
…経歴など不明

- 45 張柏清 (Zhang Boqing)
…経歴など不明
- 46 菊池三芳 (きくち・みつよし)
…南京駐在員, 後に中支建設資料整備事務所勤務

(出典)

- ①「中支占領地ニ於ケル図書標本類接收整理ニ関スル件報告」1938年10月20日付 (陸支密大日記/S13～27)
- ②井村哲郎編『満鉄調査部—関係者の証言』アジア経済研究所, 1996年
- ③上海満鉄会編『長江の流れとともに』1980年
- ④『東亜同文書院大学史』滬友会, 1982年
- ⑤『上海自然科学研究所要覧』1936年
- ⑥『上海自然科学研究所十周年紀年誌』1942年
- ⑦秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会, 1991年 等より筆者が作成。

表2 学術資料接收委員会の構成員

地質学関係者

- 1 新城新蔵 (しんじょう・しんぞう)
…天文学者で京都大学総長, 上海自然科学研究所所長を歴任
- 2 尾崎金右衛門 (おざき・きんえもん)
…東亜同文書院第17期卒業生, 上海自然科学研究所地質学科研究員
- 3 小幡忠宏 (おばた・ただひろ)
…上海自然科学研究所地質学科副研究員
- 4 佐藤捨三 (さとう・すてぞう)
…上海自然科学研究所地質学科副研究員
- 5 石川七右衛門 (いしかわ・しちえもん)
…上海自然科学研究所技術員
- 6 小倉広数 (おぐら・ひろかず)
…経歴など不明

生物学・植物学関係者

- 7 大内義郎 (おおうち・よしろう)
…上海自然科学研究所生物学科研究員, 東亜同文書院院長大内暢三の子息
- 8 御江久夫 (みごう・ひさお)
…上海自然科学研究所生物学科研究員, 戦後に山口大学理学部長
- 9 富田軍二 (とみた・ぐんじ)
…上海自然科学研究所生物学科副研究員
- 10 岡田弥一郎 (おかだ・やいちろう)
…東京文科大学教授
- 11 花岡利昌 (はなおか・としまさ)

…東京文科大学学生

考古学関係者

- 12 松本信広 (まつもと・のぶひろ)
…慶應義塾大学文学部教授
- 13 高橋寅雄 (たかはし・とらお)
…上海自然科学研究所南京駐在員, 後に中支建設資料整備事務所に勤務
- 14 赤堀英三 (あかほり・えいぞう)
…考古学者, 『原人の発見』(鎌倉書房, 1948) や『中国原人雑考』(六興出版, 1981)

事務関係者

- 15 上野太忠 (うへの・たいちゆう)
…上海自然科学研究所事務所副主事, 前出
- 16 寛三郎 (かけい・さぶろう)
…上海自然科学研究所書記
- 17 福岡重徳 (ふくおか・しげのり)
…上海自然科学研究所書記
- 18 宮地正吉 (みやじ・しょうきち)
…上海自然科学研究所技術員
- 19 宮地三芳 (みやじ・みつよし)
…上海自然科学研究所南京駐在員。後に中支建設資料整備事務所杭州標本部勤務
- 20 海野隆次 (うんの・りゅうじ)
…上海自然科学研究所技術員
- 21 外山八郎 (とやま・はちろう)
…上海自然科学研究所技術員

(出典)

- ①「中支占領地ニ於ケル圖書標本類接收ニ関スル件報告」1938年10月20日付（陸支密大日記/S13～27）
- ②『上海自然科学研究所要覧』1936年
- ③『上海自然科学研究所十周年紀年誌』1942年 等から筆者が作成。